

ながの 植物防疫

一般社団法人 長野県植物防疫協会

〒380-0837

長野市大字南長野字幅下667-6

長野県土木センター内

電話 026-235-3510

FAX 026-235-3583

令和7年度長野県農政の 基本方向と環境にやさしい 農業の推進

長野県農政部農業技術課 羽生友多

日頃より皆様には本県農政の推進、とりわけ環境にやさしい農業への御理解と御協力を賜り、感謝申し上げます。

さて、本県では令和5年度から令和9年度までの5か年計画である「第4期長野県食と農業農村振興計画」（以下「第4期食農計画」という）を策定しており、「人と地域が育む 未来につづく 信州の農業・農村と食」を基本目標とし、総合的かつ計画的に施策を推進しております。

計画では、「担い手」、「果樹」、「環境にやさしい農業」、「輸出」を、特に注力していく「重点的に取り組む事項」として位置付けています。

本稿では、主に環境にやさしい農業と植物防疫に係る昨年度の特徴取組や令和7年度の施策について紹介させていただきます。

【信州の地域に広がる有機農業スタートブック】

有機農業の推進にあたっては、生産者と消費者が有機農業の価値を共有し、顔の見える信頼関係を築き、地域ぐるみで取り組むことが大切であることから、参加型保証システムが取組が効果的です。県では、こうした取組を行うために、押さえておくべきポイントをまとめたスタートブックの策定を進めており、パブリックコメントにて御意見を募集しました。

(<https://www.pref.nagano.lg.jp//nogi/yuki/pgs-startbook.html>)

今後皆様の御意見をもとに修文し、試行を行い、取組を広げてまいります。

目次

◇令和7年度長野県農政の基本方向と 環境にやさしい農業の推進……………	1
◇新しく普及に移す農業技術……………	3
◇令和7年度農業等普及展示は設置状況……………	6
◇話題の病害虫「ネギ類の黒腐菌核病」……………	7
◇話題の農薬「トレフェノサイド乳剤」 (大豆作帰化アサガオ類防除対策)……………	8
◇植防短信……………	9
◇地域情報……………	10
◇協会だより……………	11

【長野県農業試験場と病害虫防除所の組織改正】

気候変動等の影響による新たな病害虫の発生や侵入に対し、試験研究機関の専門的な知見を防除対策に速やかに反映させ、より機動的な対応を可能とするため、長野県農業試験場と病害虫防除所を一体化しました。

【有機農業などの環境にやさしい農業の面的拡大と安全安心な農産物の生産】

第4期食農計画に基づき令和7年度に取り組む具体的な内容のうち、環境農業に関係する項目は次のとおりです。

1 有機農業などの環境にやさしい農業の面的拡大

(1)有機農業などの環境にやさしい農業への転換推進
農業生産に起因する環境負荷の低減を図り、持続可能な農業に資するため、国が策定したみどりの食料システム戦略を踏まえ、有機農業などの環境にやさしい農業の地域ぐるみでの展開や農業分野における脱炭素への貢献に向けた地球温暖化緩和技術の実証・普及と、実需者・消費者など関係者の理解促進を図ります。

環境にやさしい農業の「実践者」や「農産物」の見える化を推進するため、みどりの食料システム法に基づき、化学合成農薬・化学肥料・温室効果ガスの削減等に取り組む農業者等の認定を進めます。有機農業で生産された農産物の販路開拓や給食への利

用等有機農業の産地づくりに係る取組（オーガニックビレッジの創出）を支援するとともに、化学農薬や化学肥料、温室効果ガス等を削減するグリーンな栽培体系への転換を進めます。

(2) 農業分野における脱炭素への貢献

牛のげっぷ等から発生する温室効果ガスの排出抑制に向けた新技術や花き栽培施設の保温性改善の検討等、地球温暖化緩和技術の実証・導入・普及を進めます。

また、果樹せん定枝等未利用有機質資源を活用した炭素貯留の取組や、脱炭素化につながる生分解性マルチの利用促進の検討を進めます。

2 安心安全な農産物の生産

(1) GAP（農業生産工程管理）の推進

マーケットニーズに応じた農業者等の国際水準 GAP の認証取得支援や、既存の GAP から「農場経営管理」と「人権保護」の 2 分野を追加した国際水準の取組へのステップアップを推進します。

(2) 農薬適正使用の推進

農薬の安全かつ適正な使用を徹底するため、農薬使用者等を対象とした研修会を引き続き開催します（令和 7 年度の「農薬適正使用研修会」日程については、後段にて掲載）。

【令和 7 年度植物防疫事業】

環境にやさしい農業の取組拡大や、安全安心な農産物の生産の推進にあたっては、植物防疫事業による支援が欠かせません。

全国的に問題となっている病害虫については、「スイカ果実汚斑細菌病」、「トマトキバガ」があり、これらについて県では、農林水産省名古屋植物防疫所と連携し調査等を実施しているところです。今後も調査等を継続し、最新情報を提供するとともに、まん延防止に取り組んでまいりますので、御協力をお願いします。

新たな病害虫の発生やまん延など、病害虫防除が複雑多様化している状況の中で、適切な防除が行えるよう、引き続き、次のとおり植物防疫事業を推進してまいります。

1 長野県農業試験場病害虫防除部の運営

前述のとおり、組織改正を行った病害虫防除部で

は、病害虫発生予察、病害虫防除及び農薬適正使用の指導等の植物防疫業務にあたります。

また、農業協同組合等の職員に病害虫防除員を委嘱し、各区域内の病害虫の発生状況を常に把握し、適時適切な防除指導を実施します。

2 農作物病害虫発生予察

病害虫の発生及び被害を的確に予測し、適期防除及び農薬の効率的な使用を図るため、病害虫発生予察事業を実施します。

病害虫発生の予測及び防除対策に関する情報については、発生状況や防除方法等を含め、病害虫防除部ホームページで提供してまいります。

また、キウイフルーツかいよう病（Psa 3）、スイカ果実汚斑細菌病を含め、チチュウカイミバエ、コドリリング、火傷病、テンサイシストセンチュウ等の重要病害虫の侵入警戒調査を継続して行っています。平成 29 年に発生が確認された「テンサイシストセンチュウ」については、緊急防除区域が設定され、各種規制がされていますので、引き続き、生産者の皆様の御協力をお願いします。

3 農薬適正使用対策

残留農薬基準値を超過する事例は、全国では依然として年間 20 件以上発生しています。原因は、ラベルの確認不足による適用外使用や周辺作物への配慮不足によるドリフトが大半を占めています。

農薬散布時には周辺住民、作物、環境に十分配慮するとともに、散布後の機械・器具の洗浄を確実に行っていただくよう改めてお願いします。

令和 7 年度は、農薬の飛散防止対策や農薬適正使用等を徹底し、農薬による危被害の発生防止に取り組むとともに、「6 月 1 日から 8 月 31 日」と「11 月 16 日から 30 日」を農薬危害防止運動期間として、農薬販売者、農薬使用者等への立入調査等を予定しています。

毎年、期間中に実施している農薬適正使用研修会は、本年度は 6 月 3 日（火）にオンライン配信と現地会場のハイブリッドにて開催予定です。

マイナー農作物の農薬登録拡大については、優先順位を決めて、引き続き必要な農薬の登録・適用拡大を進めます。

4 農林航空事業

無人航空機による農薬空中散布については、「長野県無人航空機利用空中散布等作業指導要領」、「無人ヘリコプターによる農薬の空中散布に係る安全ガイドライン」及び「無人マルチローターによる農薬の空中散布に係る安全ガイドライン」に沿って適切な防除を推進するとともに、オペレーターの技術力の向上や危被害の防止に引き続き取り組んでまいります。

空中散布等の安全かつ適正な実施のために、十分な事前準備と余裕をもった散布を心掛けていただくよう、指導啓発を行ってまいります。

5 輸出検疫

青果物の輸出は、植物検疫と相手国の残留農薬基準値対応が課題となるほか、国や品目により植物防疫法上の検疫条件が異なります。最新の情報を得ながら、輸出を計画する産地を支援してまいります。

以上、本年度の主な事業等を紹介しましたが、関係する皆様方の一層の御理解、御協力により環境にやさしい農業と植物防疫を推進してまいりたいと考えておりますので、本年度もよろしくお願いいたします。



農業技術課 副主任専門技術員 横澤志織

令和6年度第2回普及技術のうち、病虫害防除に関する課題についてその概要を紹介する。詳細は、長野県農業関係試験場ホームページ (<https://www.agries-nagano.jp/>) を確認いただきたい。

【農薬に関する注意事項】

下記の農薬の記載は、普及技術検討会への提案時（2025年2月19日現在）の農薬登録内容に沿っている。その後の農薬登録内容変更もあり得るので、農薬使用時には、農薬ラベルに記載の適用作物、希釈倍数・使用量、使用方法、使用時期、使用回数等について再度確認し、使用者の責任において適正に使用する。また、上記ホームページにおいて利用上の留意点を必ず確認する。

農薬の使用にあたっては、蚕、ミツバチ、天敵等の有用生物や水産動植物への影響や人畜毒性、農作物の薬害等の注意事項も確認し、農薬の危被害防止に努める。なお、病虫害の薬剤抵抗性発達を防ぐため、FRACコードやIRACコードを参考に作用機構分類の異なる薬剤をローテーションで使用する。

1 普及技術

(1) アゾキシストロビン耐性ダイズ紫斑病菌の発生及

び代替剤の防除効果

【成果の内容・特徴】 県内各地から採取した紫斑粒からアゾキシストロビン耐性ダイズ紫斑病菌の発生を確認している。耐性菌が存在するほ場では、アミスター20フロアブルの防除効果は低下する。耐性菌の発生が疑われるほ場では、ダイズ紫斑病防除にニマイバー水和剤の1,000倍液、プランダム乳剤25の3,000倍液のいずれかを散布する。

【利用上の留意点】 QoI剤耐性菌では、1つの薬剤に耐性を獲得すると、他のQoI剤に対しても耐性を獲得することが知られている（交差耐性）。アミスター20フロアブルの効果の低下がみられ、アゾキシストロビン耐性菌の発生が疑われるほ場では、QoI剤以外の系統ダイズ紫斑病に効果のある薬剤を散布する。薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の連用を避け他系統剤とローテーション散布する。

2 試行技術

(1) クモヘリカメムシ発生地域における水稻の斑点米抑制に有効な防除対策

【成果の内容・特徴】 南信州地域では斑点米カメムシ類のうちクモヘリカメムシの発生が特異的に多い。現地の本田防除試験の結果、茎葉散布剤のうち、エクシードフロアブル、キラップフロアブルまたはスタークル液剤10のいずれか2回散布の斑点米抑制効果が比較的高いことから、これらのうち異なる2剤を組み合わせる薬剤防除を実施する。エミリアフロアブルの2回散布は斑点米抑制効果が劣る事例が

認められたため、本剤を使用する場合は上記の剤と組み合わせた防除体系とする。いずれの薬剤とも 1 回散布では十分な斑点米抑制効果が得られにくい。水面施用剤（キラップ粒剤、スタークル粒剤、スタークル豆つぶ）は、斑点米抑制効果は認められるものの、上記の茎葉散布剤と比較すると効果が劣るため、特に斑点米被害が多発する地域では茎葉散布剤を使用する。

【利用上の留意点】 散布時期は、1 回目は穂揃期から出穂10日後頃、2 回目は 1 回目の 7～10 日後頃を目安とする。エクシードフロアブル、キラップフロアブル、キラップ粒剤、スタークル液剤10、スタークル粒剤及びスタークル豆つぶは、蜜蜂に対して影響があるので、蜜蜂等の巣箱及びその周辺に飛散する恐れがある場合には使用しないこと。また、関係機関に対して、周辺で養蜂が行われているか確認し、養蜂が行われている場合は、関係機関へ農薬使用に係る情報を提供し、蜜蜂の危害防止に努めること。

(2)ネギ葉枯病（黄色斑紋症状）の効率的な防除法

【成果の内容・特徴】 概ね白ネギの収穫 1 か月前～収穫直前に重点的に薬剤散布を行うことで、ネギ葉枯病による黄色斑紋を効率的に防除できる。

【利用上の留意点】 葉枯病以外の病害（べと病、さび病など）の多発が想定される場合は、発消長に応じて適期防除が必要となる。防除終了後は、黄色斑紋の再発生を防ぐため可能な限り早期に収穫を終えることが望ましい。

3 技術情報

(1)コラトップ豆つぶによる穂いもち防除のための効率的な薬剤散布方法

【要約】 ドローン（T10）でコラトップ豆つぶを散布した場合、機体から 2～3 m 地点まで薬剤が到達する。薬剤の自己拡散を含めると機体から約 5 m 地点までは穂いもちに対する防除効果が得られるため、目安としてドローンは約10m間隔で飛行する。

(2)ドローン散布による主要殺菌剤の穂いもちに対する防除効果と効果的な飛行方法

【要約】 主要殺菌剤をドローンで高濃度少量散布した場合の穂いもちに対する防除効果は地上散布とほぼ同等である。T10は速度18km/hかつ高度 2 m、MG-1 は速度10～15km/hかつ高度 2 mで飛行することにより防除効果が安定する。

(3)リンゴ褐斑病の近年の発生生態と二次伝染初期の効果的な防除時期

【要約】 近年におけるリンゴ褐斑病菌の子のう胞子飛散開始時期、一次伝染開始時期、一次伝染ピークは20年ほど前と比べ早期化している。また、二次伝染期の発生量も早期から多い。須坂市での二次伝染初期における防除適期は6月下旬～7月初旬と考えられ、従来の防除時期（7月上～中旬）より早まっている。

(4)すもも栽培地域のりんごにおけるスモモヒメシンの産卵及び防除時期

【要約】 すもも栽培地域のりんごにおけるスモモヒメシンの発生は以前より早まっている。本種による産卵は、主に第2世代成虫発生期（果樹試験場で7月中旬～8月中旬）以降に増加する。防除はフェロモントラップ等により発生状況を確認し、必要に応じて第2世代成虫発生期から行う。

(5)セルリー疫病の感染苗による影響及び育苗期の防除対策

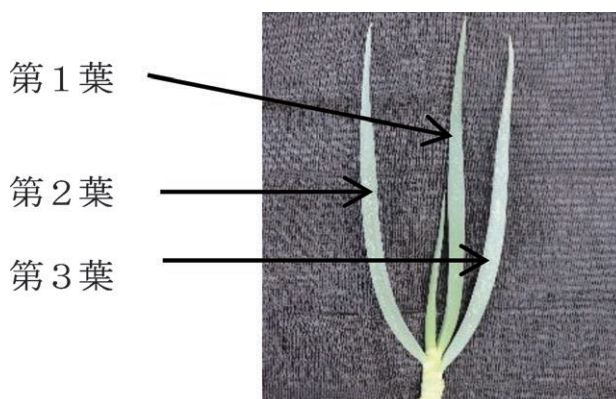


図1 白ネギの上位3葉

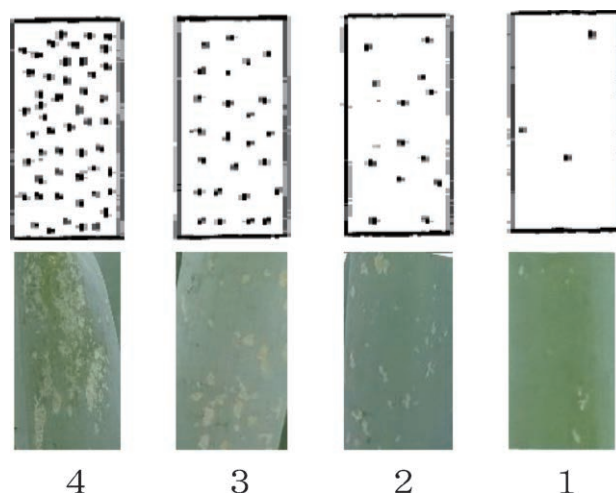


図2 被害程度の判断基準

【要約】セルリー疫病に感染した苗を本ばに定植することで、発病が拡大する。育苗期の防除対策の一つとして、育苗ポットをケミクロンGの500倍液に瞬間浸漬、1,000倍液に10分間浸漬、または資材消毒剤イチパンの500倍液に瞬間浸漬処理する。

(6)白ネギの夏秋どり作型におけるネギアザミウマの防除目安

【要約】白ネギの夏秋どり作型におけるネギアザミウマの防除は、上位3葉の成幼虫数（10頭以上）もしくは被害程度（平均値2）が目安である。

4 農薬情報

対象作物	対象病虫害	農薬名	要約
水稲	いもち病（葉いもち）	ミネクトプラスター 顆粒水和剤	イネいもち病（葉いもち）防除にミネクトプラスター顆粒水和剤の200倍液（高密度播種苗では50 g/10 a（100～200倍液））を育苗箱当たり0.5 L 灌注処理する。
水稲	いもち病（葉いもち）	コラトップ豆つぶ	イネいもち病（穂いもち）防除にコラトップ豆つぶを穂ばらみ期に250 g/10 a 散布する。
水稲	もみ枯細菌病（穂枯症）	ダブルカットトレボンフロアブル、ブラシシフロアブル	イネもみ枯細菌病（穂枯症）防除にダブルカットトレボンフロアブル、ブラシシフロアブルの1,000倍液のいずれかを散布する。ダブルカットトレボンフロアブルは合成ピレスロイド剤との混合剤であり、魚毒が強く使用は指定地域に限る。
水稲	イネミズゾウムシ、イネツトムシ	ミネクトプラスター 顆粒水和剤	水稲のイネミズゾウムシ及びイネツトムシ防除にミネクトプラスター顆粒水和剤の200倍液（高密度播種苗では50 g/10 a（100～200倍液））を育苗箱あたり0.5 L 灌注処理する。
水稲	カメムシ類	スタークル液剤 10	水稲のカメムシ類防除にスタークル液剤 10 を、産業用マルチローター（ドローン）による散布では8 倍液、地上散布では1,000 倍液を散布する。
きゅうり	炭疽病	テーク水和剤	キュウリ炭疽病防除にテーク水和剤の600 倍液を散布する。
キャベツ	黒斑病	カンタスドライフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤	キャベツ黒斑病防除にカンタスドライフロアブルの1,500 倍液またはファンタジスタ顆粒水和剤の2,000 倍液を散布する。
キャベツ	黒斑細菌病	クプロシールド	キャベツ黒斑細菌病防除にクプロシールドの1,000～2,000 倍液を散布する。
ブロッコリー	軟腐病	バリダシン液剤 5	ブロッコリー軟腐病防除にバリダシン液剤 5 の800 倍液を散布する。
レタス・非結球レタス	すそ枯病	バリダシン液剤 5	レタス・非結球レタスのすそ枯病防除にバリダシン液剤 5 の800 倍液を散布する。
キャベツ	コナガ	フィールドマストフロアブル	キャベツのコナガ防除にフィールドマストフロアブルの4,000 倍液を散布する。
レタス・非結球レタス	アブラムシ類	セフィーナDC	レタス・非結球レタスのアブラムシ類防除にセフィーナDC の4,000 倍液を散布する。
レタス	アザミウマ類	ファインセーブフロアブル	レタスのアザミウマ類防除にファインセーブフロアブルの1,000 倍液を散布する。
セルリー	ハダニ類	サンクリスタル乳剤、フーモン	セルリーのハダニ類防除にサンクリスタル乳剤の300 倍液、フーモンの1,000 倍液を散布する。
アスパラガス	アザミウマ類	ファインセーブフロアブル	アスパラガスのアザミウマ類防除にファインセーブフロアブルの2,000 倍液を散布する。
ねぎ	ネダニ類	D-D 剤（テロン、D-D、DC 油剤）	ねぎのネダニ類防除にD-D 剤（テロン、D-D、DC 油剤）を（10 a あたり20 L）縦横30cm 間隔の千鳥状に、15～20cm の深さに灌注し、直ちに覆土鎮圧する。

令和7年度農薬等普及展示ほ設置状況

農業農村支援センター	展 示 薬 剤	作 物	防 除 対 象 等
佐久	ICジンク水和剤 スクレアフロアブル フーモン ファインセーブフロアブル ピシロックフロアブル トランスフォームフロアブル ベジセイバー クサトッタ 1 キロ粒剤	もも ブロッコリー きく レタス トルコギキョウ はくさい ブロッコリー 水稲	モモせん孔細菌病 黒すす病 ハダニ類 アザミウマ類 立枯病、根腐病、腐敗病（ピシウム菌） アブラムシ 黒すす病 雑草イネ
上田	フセキフロアブル セイテン 1 キロ粒剤 フーモン ツインバリアー水和剤 スタメン 1 キロ粒剤 スタークル（アルバリン）顆粒水溶剤	だいず 水稲 トマト りんご 水稲 アスパラガス	紫斑病 水田一般雑草 コナジラミ類 炭疽病、輪紋病 水田一般雑草 カスミカメ虫ムシ
諏訪	カナメフロアブル センメツZジャンボ ユニフォーム粒剤 フーモン レプラスギアジャンボ	きく 水稲 セルリー とうもろこし 水稲	白さび病 水田一般雑草 疫病 ハダニ類 水田一般雑草
上伊那	ミギワ10フロアブル ゼアス 1 キロ粒剤（雑イネ） クサトッタ 1 キロ粒剤	きゅうり 水稲 水稲	炭疽病 雑草イネ 雑草イネ
南信州	ベランティーフロアブル ケンジャフロアブル アカツキ豆つぶ250 セーフガード乳剤 ジュリボフロアブル カクシン楽粒 スタメンフロアブル コサイド3000	りんご きゅうり 水稲 ダリア ねぎ 水稲 水稲 なす	褐斑病 つる枯病 水田一般雑草 うどんこ病 ネダニ類 水田一般雑草 水田一般雑草 褐斑細菌病
木曽	センメツZジャンボ プライオリティ 1 キロ粒剤	水稲 水稲	水田一般雑草 水田一般雑草
松本	フセキフロアブル セイテン 1 キロ粒剤	だいず 水稲	紫斑病 水田一般雑草

農業農村支援センター	展 示 薬 剤	作 物	防 除 対 象 等
松本	カクシン薬粒	水稲	水田一般雑草
北アルプス	ベランティーフロアブル	りんご	褐斑病
	フセキフロアブル	だいず	紫斑病
	ニマイバー水和剤	だいず	紫斑病
	カクシン薬粒	水稲	水田一般雑草
	ソニックブームZ1キロ粒剤	水稲	水田一般雑草
長野	センメツZ1キロ粒剤	水稲	水田一般雑草
	セイテン1キロ粒剤	水稲	水田一般雑草
	ユニフォーム粒剤	やまのいも	根腐病
	ゼアス1キロ粒剤	水稲	水田一般雑草
	プロフレアSC	アスパラガス	ヨトウムシ類
北信	ベランティーフロアブル	りんご	褐斑病
	ピシロックフロアブル	トルコギキョウ	立枯病、根腐病、腐敗病（ピシウム菌）
	ゼアスジャンボ	水稲	水田一般雑草
	ゼアス1キロ粒剤（雑イネ）	水稲	雑草イネ
	スタークル（アルバリン）顆粒水溶剤	アスパラガス	カスミカメ虫ムシ
	クサトック1キロ粒剤	水稲	雑草イネ

話題の病害虫

ネギ類の黒腐菌核病

長野県野菜花き試験場 山岸菜穂

【発生状況】

黒腐菌核病は、昭和34年に栃木県のねぎで発生が確認されその後、各地で発生が問題となっています。長野県においては、2024年に、北信地域のたまねぎ、ねぎ、にんにくの栽培ほ場において、地上部の生育が悪く、地下部の表面に白色の菌糸塊と黒色小菌核が付着する株が認められました。本症状の原因について調査したところ黒腐菌核病であることが判明し、病害虫防除所から特殊報が発出されています。本病は土壌病害で防除が難しく、発生が問題となっている地域において精力的に防除対策技術の開発が取り組まれてきています。長野県のネギ栽培は、

生産拡大や作期拡大に伴い、連作年数や栽培期間が長くなる圃場が認められています。このように連作年数や栽培期間が長くなると、黒腐菌核病の発生リスクが高まる可能性があります。これまでに明らかになっている発生生態や防除技術を参考に、的確な診断を行い、防除対策を実施する必要があります。

【発生生態と病徴】

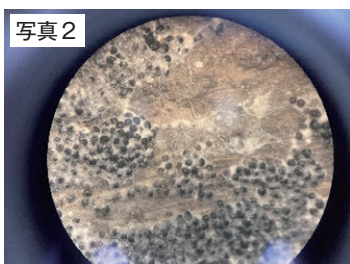
発病初期は、葉先枯れや下葉の黄化などの生育不良症状が認められます。病徴が進展すると地際が軟化腐敗し、枯死に至る場合もあります。地際部分を観察し、黒色の菌核を確認することで、本病と確認できることが多いです（写真1）。本病の発病適温は低温とされており、20℃付近で緩やかに発病を開始し、14～17℃で最も発病が多くなると考えられます。

病原菌は、糸状菌

写真1



(*Sclerotium cepivorum*)
で、発病部分には小さく黒い菌核（直径0.2～1mm程度）を形成します(写真2)。この菌核は、罹病残渣とともに土壌に入り、土壌中では数年間生存することができます。ネギが作付けされると、菌核が発芽して菌糸を伸ばし、ネギに感染します。定植前の土壌100 gあたりの菌核数が0.1個であっても発病が認められたという報告もあり、連作で被害が拡大します。



【防除対策】

耕種の防除技術として、まずはユリ科以外の作物

との輪作があげられます。次に、病原菌の植物への感染はpH 7.0以下が好適とされており、土壌をpH 7.0以上に矯正することが有効です。また、罹病残渣を適切に処分することや、トラクターなどに付着した土壌を介して発病圃場を拡大させないように注意することも重要な対策です。化学的防除技術では、土壌消毒剤に加えて、生育期に使用できる薬剤などの登録が拡大されてきています。特に、育苗期後半～定植当日にセル成型育苗トレイまたはペーパーポット苗に灌注処理できる薬剤の活用は省力的で有効な防除方法になります。薬剤の使用にあたっては、農薬ラベル等での登録の有無、使用時期等の最新情報を必ず確認してください。

話題の農薬

トレファノサイド乳剤による 大豆作における 帰化アサガオ類の防除対策

日産化学株式会社 加々美貴弘

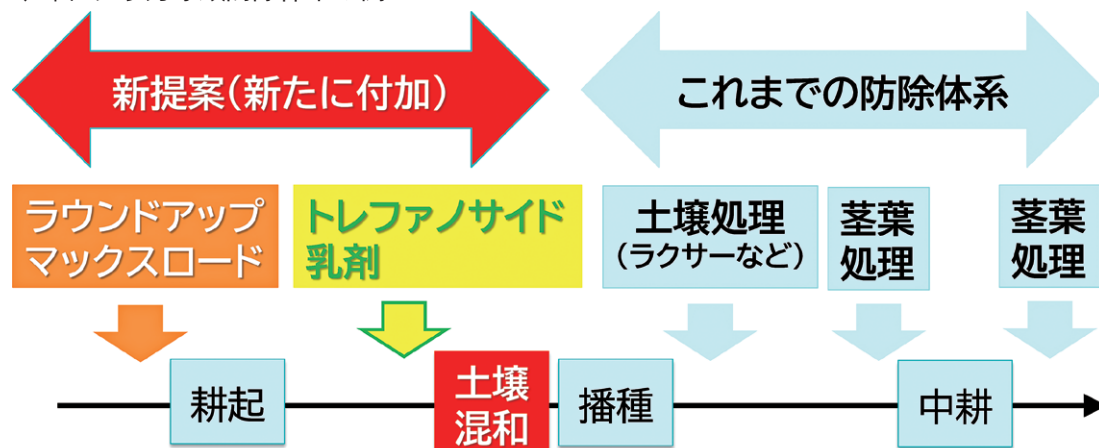
トレファノサイド乳剤は1966年2月に初登録され、今年で59歳となりました。長きにわたりご愛顧ありがとうございます。

古い薬剤ではありますが、近年、大豆作で大きな問題となっている帰化アサガオ類に対して播種前に「全面土壌混和」することで高い防除効果が期待できます。



帰化アサガオ類が蔓延した大豆圃場

◆帰化アサガオ類防除体系の例



◆アサガオ類防除におけるトレファノサイド乳剤の上手な使い方

- ✓ 散布時の圃場は、耕起後あるいは雑草・残渣の少ない状態にしてください。(麦跡の不耕起状態など、残渣が多いと効果が劣ります)
- ✓ 推奨薬量は300ml/10a
- ✓ 薬剤散布後は、速やかに土壌混和してください。(2～3時間以内がおすすめ)
- ✓ 土壌混和の深度は、10cm程度。
- ✓ 播種は後日でも大丈夫です。混和同時播種も可能です。
- ✓ 他の薬剤との体系処理が必須です。(土壌処理剤は通常通り使用してください)
- ✓ アサガオの発芽を大幅に減少させ、さらに生育を10日～2週間遅らせます。(次の茎葉処理剤または中耕までに余裕を持たせます)

◆2024年試験事例の紹介

播種43日後の様子(7月25日)



5/30 作業なし
5/31 耕起
6/6 作業なし
6/12 播種
6/14 土壌処理剤(ラクサー乳剤)
7/4 茎葉処理剤 ⇒中耕培土



5/30 ラウンドアップマックスロード散布
5/31 耕起
6/6 トレファノサイド乳剤散布+当日耕起
6/12 播種
6/14 土壌処理剤(ラクサー乳剤)
7/4 茎葉処理剤 ⇒中耕培土

ラウンドアップマックスロード→トレファノサイド乳剤 体系で帰化アサガオ類の発生密度が大幅に減少!

帰化アサガオ類にお困りの圃場で是非お試しください

植防短信

植物防疫技術研修会に参加しました

令和7年2月26～28日に、日本植物防疫協会の主催で病害虫薬効薬害試験の技術研修会が開催され、全国の公設試験場関係者が参加しました。

今回は、ウイルス媒介虫のコナジラミ類のほか、

ハダニ類、アザミウマ類、アブラムシ類などの生態や、薬剤感受性検定法ならびに防除試験のコツ、さらにチョウ目害虫も含めた増殖・飼育方法等を研修しました。コナジラミ類については、元熊本県の試験場の行徳氏よりウイルス媒介抑制効果の試験方法等について詳しく講義いただきました。

実技研修では、ナミハダニの成虫・卵・幼虫・第一、第二若虫の識別や、ナミハダニ雌成虫をインゲン葉に放飼し、2日間飼育することで、ナミハダニの卵を採取し、卵や成虫の薬剤感受性を検定する方

法（リーフディスク法）を学びました。また、各種アザミウマのプレパレート標本や、簡易吸虫管等の作成法も履修しました。

他の都府県でも人員不足や人事異動等の影響で、

飼育方法や薬剤検定の技術継承が難しく、今回のように薬剤害試験のスペシャリストから実技形式で研修できる機会は大変貴重で、とても有意義でした。

（野菜花き試験場 山岸 希）

地域情報

オーニソガラム高畝栽培による軟腐病対策

安曇野市で作付けが進められているオーニソガラムは、生育期における腐敗性病害が問題になっており、特に降雨の多い年に発生が多い。水田の輪作体系に組み込まれていることから湿害による影響が大きいと考え、令和6年度に高畝栽培の試験区を設置して腐敗性病害の発生率を調査しました。

定植2か月後に両区で腐敗性病害の症状を確認し、症状から軟腐病であることを確認しました。定植3か月後の切花期軟腐病発生率は、高畝区（畝高15～18cm）で8.8%、慣行区（畝高5～7cm）で20.9%となり、高畝栽培により軟腐病の発生が抑えられることが示唆されました。

定植3か月後に軟腐病の圃場内発生分布を調査すると、圃場や畝の傾斜など地面が低くなった部分で軟腐病が発生しており、オーニソガラムは水分ストレスに敏感に反応する植物であると再認識しました。

最後に病気のことではありませんが、5月下旬に定植し、8月中下旬の収穫期を迎えた作型でガク焼け及び花焼けが多く発生しました。一方、4月上旬又は6月下旬定植の作型では、8月上旬に花焼けが発生しなかったことから、定植時期の検討や場合によっては遮光資材などの高温対策が必要であると感

じました。なお、花焼け発生率は、高畝区と慣行区で差が見られませんでした（達観調査）。

（松本農業農村支援センター 三宅明子）

子実とうもろこしのアワノメイガを対象としたドローンによる殺虫剤散布試験を行いました

北アルプス地域における新たな転作作物として子実とうもろこしを導入した大規模水稻経営体を対象に、関係機関と連携し、害虫の食害痕が原因で発生するかび毒の対策について検討し、アワノメイガを対象とした防除試験を実施しました。

防除試験は（一社）植物防疫協会の農薬試験として農薬展示ほを設置し、絹糸抽出期の8月中旬に無人航空機（ドローン）を用い「プレバソnfフロアブル®5」を散布し、防除効果を確認しました。播種後の有効積算温度から絹糸抽出期を予測し（予測日：8月17日、実測日：8月18日）、防除に向け事前準備ができていたことから、雌穂にアワノメイガ等が侵入する前の適期に試験を実施できました。その結果、1回のみの散布でも高い防除効果が得られ、アワノメイガによる被害が減少し、被害痕に発生するかびも減少、出荷時に行われた分析検査では、かび毒は基準値以下となりました。

2月に試験結果の検討会を開催し、JA大北、種苗会社2社、県農政部農業技術課専門技術員、県畜産試験場に報告し、関係機関との情報共有を図りました。（北アルプス農業農村支援センター 清原佑介）



定植の様子（手前）高畝区、（奥）慣行区



ドローンによる殺虫剤散布(大町市)

協会だより

(一社) 長野県植物防疫協会 令和7年度予算が可決

令和7年3月13日、長野市内において(一社)長野県植物防疫協会理事会を開催し、令和7年度予算を下記のとおり決定しました。引き続き業務推進にご支援をお願いします。(単位：千円)

科 目	実施事業 特別会計	事業会計	法人会計	合 計
I 一般正味財産増減の部				
1. 経常増減の部				
経常収益	6,886	67,880	2,140	76,906
経常費用	12,275	63,507	5,667	81,449
当期経常増減額	△ 5,389	4,373	△ 3,527	△ 4,543
2. 経常外増減の部				
他会計振替額	5,389	△ 8,921	3,532	0
法人税等	0	83	5	88
当期一般正味財産増減額	0	△ 4,631	0	△ 4,631
一般正味財産期首残高	0	95,848	32,399	128,247
一般正味財産期末残高	0	91,217	32,399	123,616
II 指定正味財産増減の部	0	0	0	0
III 正味財産期末残高	0	91,217	32,399	123,616

令和7年度(一社)長野県植物防疫協会関係者の皆様①

所 属	所 長	技術経営普及課長	担 当
佐久農業農村支援センター	篠原 亘	小笠原滋和	茅野 好司
上田農業農村支援センター	小林 佳昭	田中 真延	佐藤憲二郎
諏訪農業農村支援センター	中澤 克明	百瀬 豊	山口 昌彦
上伊那農業農村支援センター	西澤 俊樹	安藤 忠幸	宮下 純
南信州農業農村支援センター	本井 浩	百瀬 義男	片桐 直樹
木曽農業農村支援センター	倉田庄一郎	清水 伸也	大島 洋一
松本農業農村支援センター	小林 健次	高橋 英昭	三宅 明子
北アルプス農業農村支援センター	菅澤 勉	篠田 秀明	清原 佑介
長野農業農村支援センター	原 啓一郎	町田 博美	藤沢真由美
北信農業農村支援センター	高橋 敬三	千野 博敏	小田中一彦

令和 7 年度（一社）長野県植物防疫協会関係者の皆様②

所 属		職	氏 名	所 属		職	氏 名								
県	農政部 農業技術課	部 長 課 長 企画幹兼課長補佐 企画幹兼環境農業係長 担当係長 主 任 技 師 技 師 技 師 技 師 副主任専門技術員 副主任専門技術員	村山 一善 片井 基典 原 康一 上久保和芳 脇本 有希 羽生 友多 曾根 真奈 森 和也 雲崎 凌 錢谷 健 奥出 聡美 横澤 志織	県	果樹試験場 栽培部 環境部	場 長 部 長 部 長 研究員 研究員 技 師 技 師	中澤 徹守 江口 直樹 近藤 賢一 石井 伸洋 宮寄 光 島袋 稚子 岩岡 広樹								
	環境農業係				野菜花き試験場 野菜部 環境部	場 長 部 長 部 長 専門研究員 研究員 研究員 研究員 技 師 支場長 研究員	宮本 賢二 小松 和彦 小林 富雄 小木曾秀紀 山岸 希 森野林太郎 簗島 萌子 浅見菜由子 岩波 靖彦 石山 佳幸								
	専門技術員 (農業試験場 駐在)				佐久支場	畜産試験場 飼料環境部	場 長 部 長 専門研究員 研究員 研究員 技 師	松崎 良一 清沢 敦志 伊藤 達也 有野 陽子 古畑 祥吾 天野 瑠佳							
	専門技術員 (野菜花き試 験場駐在)	主任専門技術員 副主任専門技術員	井ノ口明義 布山 佳浩						南信農業試験場 栽培部	場 長 部 長 主任研究員 研究員	小川 秀和 金子 政夫 福田 勉 萬田 等				
	農業試験場 研究企画・知 的財産部	場 長 部 長	佐々木直人 栗原 潤									農協中央会 営農農政部	部 長	小山 清孝	
	病害虫防除部	主任研究員 研究員 研究員 部 長 担当係長 主 幹 主 幹 主 査 課長補佐	山岸 菜穂 檜本 克樹 諸 人誌 近藤 義彦 藤沢 喜一 小林 長生 内津 政直 若林 秀忠 北澤 修司												全農長野県本部 生産購買部 肥料農薬課
		重要病害虫対 策専任担当 中南信班	班 長 主 査 主 任 技 師 部 長 主任研究員 研究員 技 師 部 長 研究員 研究員 技 師 技 師		佐原 吉実 小口さなる 内田 英史 増澤 高亨 青木 政晴 田淵 秀樹 丸山 翔太 望月 崇史 宮原 薫 矢崎 明美 中島 宏和 阿曾 和基 島上 卓也 高野 萌	NOSAI長野 事業部 収穫共済課	常務理事 参 事 部 長 課 長	中村 光男 宮澤 哲弘 植田 雅夫 久保 賢一							
			作物部							農薬卸商業協同組合	理事長 事務局長				
					環境部										

【行事】

- 3 月10日 農薬安全使用対策部会・農林航空部会
(長野市)
- 3 月10日 無人航空機安全利用研修会 (長野市)
- 3 月13日 理事会 (長野市)

- 4 月15日 農薬展示ほ設計会議 (Web)
- 4 月17日 植物防疫事業推進会議 (塩尻市)

「ながの植物防疫」はホームページでもご覧になれます。
U R L <https://www.nagano-ppa.jp/>